

# 「日本人とは何か？」を問い 世界と戦うための必読書

## 日本人の「型」を考える

「経営者のなかにも武士の雰囲気を感じさせる方は多くいますよ。その人が武士道を意識しているかは別としても、諸外国からもリスベクトされる日本人には、武士道の片鱗が見えるということはあると思います」

こう話すのはカリスマ・ヘッドハンターの異名を持つ縄文アソシエイツ社長の古田英明氏。企業の幹部や幹部候補の人材をスカウト・紹介するなかで、外資系・日系問わず、多くの経営者と接してきた。残念ながらすべての経営者に武士道と言えぬ品格を感じるわけではないそうだが、経営者を一つのリーダーの形として考えた場合、武士道という曖昧なものを一度は考えてみる必要はあると言っている。

「武士道を体現すること、経営者として立派であることは、必ずしも同じことではありません。経営者の仕事というのは、時として下劣な場合もあるからです。なかには立派な精神を持つていたらできない仕事もあると思います。しかしながら、経営者を一人のリーダーとして見た場合、自分の考え方を計る際に、武士道のような考え方を軸に置くことができます。仮に新渡戸稲造が書いた『武士道』を一つの理想・理念だとすれば、自分の言動との距離を知る

ことは、とても価値のあることだと考えています」

縄文アソシエイツには、オススメする五冊の本があるという。うち二冊はその時宜で替わるそうだが、三冊は不動のもの。新渡戸稲造の『武士道』もそのなかの一冊に含まれている。他の二冊は内村鑑三の『代表的日本人』と、西郷隆盛の『南洲翁遺訓』だ。

「グローバルに旅立って行く人には、この三冊はオススメです。この三冊を持っていると日本人としてはあまり困らないと思います。武士道とは、一度は考えてみる必要がある日本人の「型」作法ではないでしょうか。

グローバルに活躍している日本人には、武士道に触れることを言う人が多い。例えばメジャーリーガーのイチロー選手もサッカーの日本代表選手もわかりで、よく『武士道精神』とか『サムライ魂』と話す人がいるでしょう。日本の文化のなかに、衰えたとはいえ、まだまだ脈々と息づいている何かがある。その何かを、ある切り口で書いたのが新渡戸稲造の『武士道』であり、山本常朝の『葉隠』だと思っています。日本人の生き方としてある何か、これをグローバルで活躍している人ほど大切に、その人なりの切り口で言葉にしている。そういう集合無意

識みたいなものが、武士道と言われるものでしょう。

経営者として、日本人とは何か、日本企業とは何かを考える時に、一度は通過してみなければいけない「型」ではないかと思えます。聖書やコーランなどを持つてぶつかってくる相手に対し、こういう精神的支柱を持たずにグローバルに戦うのは不可能ですし、相手からもリスベクトされないわけです」

新渡戸稲造は『武士道』の結びにおいて「武士道は一の独立せる倫理の掟としては消ゆるかも知れない、しかしその力は地上より滅びないであろう」(矢内原忠雄訳 岩波文庫)と書いている。

士農工商という階級制度は明治維新で消滅し、農工商の上に立つリーダーとしての教育もされなくなつた。まさに「倫理の掟」として教える者もなく、学ぶ場も潰れてしまったのである。新渡戸の生きていた時代は、まだ一八六七年の大政奉還以前の名残りが残っており、武士の精神は色濃く受け継がれていただろう。そんな時代でさえ、「消ゆるかも知れない」との恐れを感じていたのである。果たして新渡戸の憂い通り、たつた百数十年にもかかわらず、現代において武士道とは、遠い世界になつてしまった。

しかし後半の「その力は地上より



「精神的支柱を持たずにグローバルに戦うのは不可能」と古田氏。

滅びない」も当たっている。現代のグローバル化した社会で活躍する日本人にとって、一神教を持たないがゆえに「日本人とは何か」を追求するための指標として、再び武士道がクローズアップされるようになったと言える。

「新渡戸稲造の時代は、選ばれたエリートだけがグローバルの世界に参画すればよかった。ところが現代は、われわれのような庶民でさえもそこに参画せざるを得ない時代になってしまっています。グローバルに生きていくために、自分の軸をどこに置

くか。新渡戸稲造自身も、欧米に出行って言われた『日本人って何なの？』という疑問に、日本人とはこういうものだと言えぬために考えて書いたのが『武士道』なわけです。

グローバルに生きていくなかで日本人を考えることは自然の流れです。し、そのこと自体にすごく意味があります。グローバルな状況のなかで、何をもちわれわれは立つのだといった時に、あるべき姿として、過去にこういう日本人たちがいたこと、われわれがどれだけこれに近づけるかということは、考えるべき時期だ

と言えます。いまや政治の世界ですら、日本人が相手にされない時代になりつつあるわけですから、一つの軸として武士道という考え方を持つのは大事なことです」

## 腹切りのインパクト

古田氏は一冊の本として『武士道』を読んだ時に、もつとも印象に残ったのが第二章に書かれた三兄弟の切腹のシーンだったという。二四歳の兄、一七歳の次男、そしてわずか八歳の末弟が徳川家康から切腹を命じられたのだ。これは非業の死ではなく、名譽の死を遂げさせるためのものだった。二人の兄に倣い、八歳の弟も見事に腹切りをして果てたのである。『葉隠』にも「武士道と云ふは死ぬ事と見つけたり」と死に様について書かれた一節がある。

ただ、いずれの武士道においても死を美化しているわけではない。この部分だけを見て武士道精神＝特攻精神と誤解されがちだが、むしろプライド、覚悟、決意、責任を持って生きることが本来のサムライの姿である。新渡戸自身も「真の武士にとりては、死を急ぎもしくは死に媚びるは等しく卑怯」と書いている。

「三兄弟の切腹のシーンで、かわいい子供の命がなくなるわけですから、切腹に対する不合理感は当時でもあったはずで、それを名譽の死と

してよしとしていた考え方というのは、すごくインパクトがあった。

武士道とは何かと聞かれても、なかなか自分でも具体的に答えられるものではないかもしれませんが、第一章の『克己』、己に克つということは言えるでしょう。そこには忍耐、我慢がある。腹を切るという行為は、我慢の究極です。八歳の子供がそういう死を遂げることが立派とは言えないと思いますが、一人の人間として考えた時に、その覚悟や耐える人格を形成できていることは立派だと思います。

現代では教育ということが問題になっていますが、こういうことができる人間を一人でも生み出せるかどうかだと思います。自殺しろと言っているわけではありません。人格をつくりあげることが大切です。年間三万人の自殺者問題とは違う。ただ、自分の命を賭すことによって、数百年後に読むわれわれに訴えかけるメッセージ性はすごい。いまのわが国のリーダーにそれだけの覚悟を持った立派な人物がいるのか、ということですよ」

海外メディアが一国のリーダーをバカ呼ばわりする時代になった。日本人は、自らの誇りを失い、恥をかかされて終わるような国民性ではないはずだと信じたい。

(本誌・児玉智浩) **B**